9・21関西生コン労組つぶしの弾圧を許さない東海の会講演&討論会報告-2-

熊沢さんの講演に対する質問への回答

・生コン協同組合の大阪広域協は、関生と協力してきたのに、突然関生つぶしに狂奔するようになったのか?

→わからない

➡愛知連帯ユニオン G さんの補足

もともと 一面共闘 一面闘争でやってきた。この大阪の生コン価格は、共闘の成果での地区の単価を大きく上回る水準の単価を獲得してきた。(関西 18,000 愛知 10,000) 関西の生コン事業者は、経費が同じなら愛知の 8 倍の利益がある。その利益はまずもって企業に行く。当然企業であるので利益で動く。利益次第で組合と共闘または対決する。協同組合にはもともと2面性がある。組合も相当苦労して労働条件を勝ち取ってきた。

昨年、公然と敵対したのは 警察権力が徹底した関生組合つぶしに動くことを察知したからではないか。警察は事業者に対して関生から手を切ることをせまった。関生と協力するなら逮捕、 共謀で起訴、逮捕されたくなかったら関生と手を切り被害届を出せと迫っている。(大津 湖東協事件)

- ・日本の労働組合は、産業別組合への結集とならず弱体化の原因ともいわれる企業別組合が中心となってしまった?
- ➡ 60 年代人手不足の時代 賃上げのエネルギーは爆発したが、日本の諸外国にあるような労働条件なかんずく賃金の標準化を打ち立てることができなかった。職種別賃金(同一労働同一賃金)を要求もあったが、ベースアップが関心の中心であった。企業に長くくいてそこで昇進昇格していくことがその後能力主義労務管理のもとに日本の労働者に生き様になってしまった。戦後設立された労働組合は事業所別であり必ずしも企業別ではなかった。事業所横断の地域産業別の統一交渉の可能性はあったが、企業の立ち直りともに各地の事業所別組合は、企業別単組に糾合されていった。
- ➡企業別組合の弱体化(正社員の労働組合としても規制力を失う)は、企業の能力主義労務管理の浸透による労働条件の個人化、労働者の苦しみの個人化、不遇な労働者の個人責任化にある。
- ・護憲運動が議会主義に収斂されてしまったのか。革新政党はなぜ沈黙しているのか
- ➡議会主義は、国民のいやがることは言わなくなる
- →先端で過激な運動は必要 →国民の理解? 国民はわれわれの敵かもしれない
- →ラジカルな市民がこの問題を政治問題にしていく